



未知しるべ

宇野 賀津子

落語家の笑福亭小松さんが日本列島を歩いて北上中である。先週は福島で高座を開いたという。京都のルイ・パストール医学研究センターで彼のはなしを聞いたのは三月下旬、生きがい療法学会の場だった。事務局を重ね、紅白の幕をはった急ごしらえの高座で、小松さんはかなりの程度に進行していた胃がんの手術、がん告知、日本縦断行脚にいたるまでの経緯を何もしるおかしく話してくれた。

はちゃめちな生活を省みて、子供に父の生きたあかしを残したいという思いがこの旅を決意させたとのこと。病院でのエピソードいろいろ、こともなげに語り看護婦の

「絶食です」の無情さ、その苦しき。参加者の大半が似た経験をしているので、彼の話の一つ一つに「うん、うん」とあいつちを打ち、笑い、感動の涙を流した。

我がセンターでは、生きがい療法で知られる岡山県倉敷市の伊丹仁朗医師とともに毎月第四土曜日、学習会を開いている。生きがい療法の基本は病気を受け入れることから始まる。「病気にはなっても病人にはなるな」とは参加者

一回の合言葉である。したがって、この学習会のにぎやかなこと。会場の設備から片づけまで、患者がそれぞれの能力に応じて協力している。毎回の学習会は、ユー

ある落語家の高座

モアスピーチとイメージ療法に加えて、専門家の話あり、患者さんの話あり、白山に登った話あり、である。私自身の本職は、種々の観点から人の免疫機能を測るところである。たとえば、ガイドテープを聞きながら、自分の免疫担当細胞ががん細胞をやっつけようとしているイメージを描く訓練をするイメージ療法。伊丹医師と一緒に実験したところ、血液中のナチュラルキラー細胞のがん細胞をやっつける能力が、実験後は

明らかに上がった。ナチュラルキラー細胞というのは、ウイルス感染やがんに対して、すばやく働く免疫細胞である。血液中の白血球のなかに二一〇％程度、存在する。この細胞はとりわけ自分の影響を受けやすいらしい。強烈なストレスはこの細胞の機能を低下させる一方、笑いはこの機能を上昇させる。伊丹医師は吉本新喜劇へ患者を連れていって、その後でこの細胞の機能が上昇していることを示した。

がんの増殖がこの細胞のみで抑えられるわけではない。が、この細胞は発がんの抑制や転移の阻止には重要な役割を果たしているし、免疫機能を初期の段階で活性化するのは

に重要な生理活性物質を放出する。ナチュラルキラー細胞をはじめとして、がんを闘う免疫細胞の機能を少し上げてやること、がんの治療効果を大きくすることができないか、というところを考えるのが私たちの研究所の仕事でもある。ただし、大きながんが免疫機能だけで治ることはまずないから、あくまで必要な手術や治療は受けての上のこと。それに、がんの患者さんの免疫機能は低下していることも多いし、病気の進行とともに下がっていくことも事実である。でも、いくつかの免疫機能の数値は、がんの進行度よりも患者さんの日常生活の状態(専門用語で「パフォーマンス・ステータス」という)との関係が大きい。

気迫はがんを越えるか

(ルイ・パストール医学研究センター研究室長)

実際、がんの告知後に落ち込んでしまった人と比較して、病気を受け入れて闘った人の五年後の生存率はずっと高いことが報告されている。無理にでも元気に動こうとすることは、それだけで免疫系を活性化する方向に働くのかもしれない。小松さんの免疫機能もきつと、九州を出発したときより今の方が高くなっているに違いない。

小松さんの色紙には「一期一会」と書かれていた。人と人との出会いを通して、自分自身も成長したいという思いが伝わってくる。まだまだ気負いの感じられる京都での高座だったが、七月に北海道にたどり着くころには、もっとたくましくなっているに違いない。